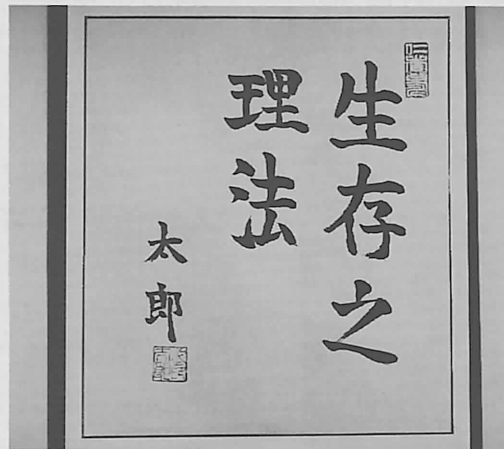


生存科学研究

ニュース

Vol.5. No.4.

1990.7.10発行



内 容

- 第51回生存科学研究会（第4回総会）
「環境の変化とその健康影響
—産業生態科学的アプローチ—
……………土屋健三郎… 1
- メディコ・エコノミックス研究会
「人生80年—生きがいの創造を求めて」
……………江見康一… 2
- 市原市『市民の健康づくり計画
シンポジウム報告書』説明会…………… 3
- 北上川プロジェクト準備会…………… 3
- 医薬問題研究会準備会…………… 4
- 第5回武見国際シンポジウム第1回準備委員会 …… 4
- ハーバード大学武見講座活動報告…………… 5
- 生存科学研究所平成2年度第1回評議員会
ならびに理事会…………… 5
- 維持会員だより…………… 6
- お知らせ…………… 6
- 研究所日報…………… 7

発行：生存科学研究会

〒104 東京都中央区銀座4-5-1

聖書館ビル303

(財)生存科学研究所内

電話 03-563-3518

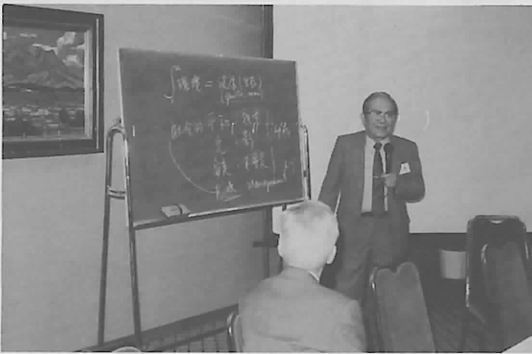
●第51回生存科学研究会

環境の変化とその健康影響
——産業生態科学的アプローチ——

産業医科大学学長 土屋健三郎

平成2年5月19日(土)午後2時より、経団連会館において第51回生存科学研究会が開催された。今回は、生存科学研究会第4回総会で、平成元年度のメインテーマ「生存環境と生存科学」の最終回であり、その総括に相応しい発表と討論が行われた。

講師は、産業医科大学学長、生存科学研究所理事、公益信託武見記念生存科学研究基金副運営委員長の土屋健三郎教授。



先生は、健康(な生存)は、諸々の環境要因のインテグレートされたものである。また、人類生存のキーワードはアダプテーションであり、それには生理的なもの(ホメオスタシス)と社会的なもの(知恵と技術)がある。アダプトする時にはリスクが伴なう。リスクが在ればマネージが必要である。とんでもないリスクが放置されていることもあり注意が必要であるが、容認可能なリスクがなにかを研究する必要もある、と話された後、現在の産業化された社会でのこれ等の問題へ取り組むために先生が創造された「産業生態科学」の意味とそのモデル、ならびにそれを用いての研究成果を発表された。土屋先生の作られ

た産業生態システムと健康に関するモデルは、産業、人口、労働力、生活状態、環境と汚染、健康、職域保健という変数群7つ(その各々が更に細分化された幾つもの変数を持つ)から成る規模の大きいものである。先生は、このようなアプローチにより求めた結果を示しながら、リスクマネジメントがより高いレベルで政策決定に反映できるようにしたいと述べられた。

コメントに立たれた大阪大学名誉教授、生存科学研究所副理事長、筑井甚吉教授は、投入産出分析(産業連関分析)の手法を用いて日本の公害除去のコスト負担を計算された際の研究方法と、GNPの3.7%を公害除去に振り向ければ公害の90%は除去できるという計算結果を披露され(事実現実はそれに近くなった)、この手法が、公害発生を疾病発生に、汚染除去活動を疾病の予防やケアに置き換えて使用できるのではないかと問われた。筑井先生の用いられたモデルは、数十項目の生産にかかわる投入と産出、生産に際して生じる汚染、ならびにその汚染を除去するための投入、当該生産物の消費とその際生じる汚染、ならびにその汚染の除去への投入の全てに関わる変数のマトリックスから成る極めて緻密なものである。

土屋先生のモデルは、筑井先生のモデルより広範囲な要素をカバーする人間の活動・生活全般に及ぶものであり、一方筑井先生のモデルは、投入産出の各要素を極めて詳細に数多く取り込み、土屋先生のモデルより精密な

ものであるが、その考え方と手法は、発表者とコメンテーターの両者が互いに驚くほど極めて類似しており、両モデルのドッキングは容易に行えると考えられる。そうなれば環境と健康、産業活動と保健・医療活動に関するダイナミックな正確なモデル分析が可能となり、それを用いて、健康づくりや健全な産業の発展を導く科学的政策決定が可能になるということも夢ではない。

討論では、今後社会的・文化的な汚染の問題も是非考えなければならないという点も指摘されたが、それと今回の問題とは当面別個に取り扱う方が良いとされた。

* * * *

なお平成2年度の主テーマは、協議の結果



「医療・経済・生存——メディコ・エコノミックス」と決まった。その際「医療」では狭い、治療医学のことばかりと誤解されかねない、保健や健康づくりも含むことを明確に示す言葉にするべきであるとの意見も出されたが、ここでは医療を予防・保健・健康づくりまでを含む広義の言葉で使っているの、そのことを常に明確にしながら議論を進めるということで、あえて変更はされなかった。

今回は第4回生存科学研究会総会でもあるので、研究会終了後、銀座の生存科学研究所会議室において恒例の懇親会が開催され、ビールを飲み交わしながら、多彩な専門分野の先生方が友情を暖めながら和やかに、そして生存科学について熱心に歓談された。



●第3回メディコ・エコノミックス研究会

人生80年—生きがいの創造を求めて

帝京大学教授 江見康一

5月26日(土)午後3時より、研究所会議室において第3回メディコ・エコノミックス研究会が開催され、江見康一教授(元一橋大学教授)が表記の発表を行った。

先生は、メディコ・エコノミックスに関する情報をできるだけ提供したいとして、日本大学創立100周年記念シンポジウムと、名古屋で開催された第3回国際長寿社会シンポジウムを紹介され、そこでの先生ご自身の発

言の内容を更に掘り下げて発表された。

* * * *

人は定年を迎えて世俗的な束縛から開放され「自由」を得る。その自由を活用して人生の仕上げをしようとする心の張りが「生きがい」であるが、老後は生きがいの喪失時代でもある。高齢化社会ではその老後が長くなり、その間のクォリティ・オブ・ライフを保てるかどうかが一番の問題である。

研究誌『生存科学』創刊号発刊

配本希望者は維持会員の申込みをして下さい

生存科学に関連する幅広い研究成果を発表する研究誌『生存科学』の創刊号が発刊になりました。生存科学研究会会員（研究所維持会員）はじめ研究所に直接関係のある方々へは既に配本済みであります。編集委員会で協議の結果、この「生存科学研究ニュース」をお届けしてきた方々でも、関連分野の研究所、大学の教室、図書館等、当方から謹呈する場合を除き、上記に該当されない方へは原則として無料配布をしないことになりました。

上記に該当されない方で配本ご希望の方は、生存科学研究所維持会員になっていただく必要があります。この際是非、ニュースに同封しました「研究誌『生存科学』配本申込み書」用の葉書で維持会員加入の申込みをしてください。

維持会員制度は研究所の活動にとって発展的再生産のエネルギー源ともなるべきものであり、維持会員の会費（継続寄付）は研究事業の拡充、より一層の社会貢献のための貴重な財源となります。

研究所は維持会員へ、研究誌の配本の他、研究所の研究成果・資料の配布、研究所が開

催する講演会・シンポジウム等のご案内、受託研究の応需、研究者・講師の派遣またはご紹介等の活動を致しています。

* * * *

維持会員会費は

個人：年間一口2万円

法人：年間一口10万円（原則として3口以上）

* * * *

なお研究誌のみの購入という方法は、原則としてはありませんが、研究所の判断で実費で交付する場合がありますので、研究誌のみの入手を希望される方はその旨を研究所へご連絡ください。

（その際の代価は一冊2,500円です。）

* * * *

研究誌『生存科学』発行にともない、この「生存科学研究ニュース」も近々更に軽量化し、速報性を高めるつもりです。またそれにともない、ニュースの配布先も研究会会員（維持会員）に絞らせていただくこととなりますのでご了承ください。

北上川プロジェクト準備会

7月14日(土)午後2時より、北上川研究プロジェクト第4回準備会が開催された。この研究会には研究者の他、関係官庁の職員も研究のため毎回参加している。

今回は(財)全国農業構造改善協会指導部長橋本五郎氏と、(財)富民協会の溝田博史氏を招い

て日本農業の現状と問題点を伺い、それを起点としてその将来について討議を行った。

橋本氏は、永年熱心に取り組んできた農村生活活性化農業構造改善事業の概要と、各地、各時代の在り様、氏が目指している農業組織化への取組とそこに見られる問題点等を詳細

研究に参加している。

今回は、齋木氏がこれまで調査研究されたなかで最も力を入れられた地域の一つ、そして地域保健調査会活動等を通して武見太郎先生や日本医師会とも関係の深い、岩手県沢内村について、その調査研究成果や、沢内村の現状、将来への問題点等について説明された。

第2回の準備会は6月16日(土)午後2時か

ら行われ、地域振興や生活改善の全国的施策について現実的な経験を参照しながら、地域的施策との関連を検討し、研究の進めかたを探ることになる。北上川流域全域を一挙に研究対象にすることは困難であり、当面は沢内村と安家(あつか)村等、研究の手掛かりがある所を対象にして取り掛かることになるであろう。

医薬問題研究会準備会

医薬問題の研究に関しては、平成2年1月18日に研究会組織化のための打合せ会が持たれており、新しい人間論に基づく医薬問題を理論的に、実践的に検討する、産・官・学が本音を出して本質を追求する姿勢で取り組む、焦点を医薬品開発における技術と評価に絞る、医療品のもたらしたマイナス面も考慮する、生命の質の向上を考慮した医薬品開発を目標にする、等が検討され、人間生存のための技術という面から掘り下げてみるものが合意されている。

第1回準備会は、4月23日におこなわれ、よりよい生存の条件の確立の観点から医薬品をあらためて評価してみることに、高齢化社会における医薬品のニーズの方向とその開発の問題も考えてみることに2つの的を絞るということに関して合意を得、6月8日の第2回

準備会でさらにその大枠の方向にそって準備がすすめられた。

(医薬問題研究会準備会メンバー)

(アイウエオ順)

青木 清	上智大学 生命科学研究所所長
粕谷 豊	東京大学名誉教授 星薬科大学学長
須藤辰夫	三共(株) 専務取締役
豊川裕之	東邦大学医学部公衆衛生学教室 教授
野口照久	サントリー(株) 専務取締役
藤野志朗	中央大学経済学部教授
柳田知司	(財)実験動物中央研究所付属 前臨床医学研究所所長
山田裕久	武田薬品工業(株) 専務取締役
小平 敦	(財)生存科学研究所専務理事
田村貞雄	(財)生存科学研究所常務理事

第5回武見国際シンポジウム第1回準備委員会

5月17日(木)正午から午後2時迄、研究所会議室において、1992年に東京で開催する第5回武見国際シンポジウムの第1回準備委員会が開催された。準備委員会の責任者は青木清

常務理事で、準備委員会には、現在ハーバード大学に行っている小林廉毅氏を除く日本からの歴代武見フェロー全員(田中慶司、藤井充、丸井英二、大前和幸、上原鳴夫、津谷喜

一郎の諸氏)が参加。

シンポジウムでは、武見先生の求める理想と生存研の実践的研究の成果を中心に、海外在住の全武見フェロー(開催の年までには50人に及ぶ予定)を招いて討議しようという計画である。

なおこの準備委員会を機会に、これら全武見フェローの連絡事務局を研究所内に設けて、ハーバード武見講座修業後の研究や実践活動の情報収集とその連携・推進に努力していくことも計画されている。

武見フェローは保健・医療に関わる研究や行政の専門家、指導的実践者で、その大半はアジア・太平洋州からの出身である。生存研が計画しているように、これらの人々と、環太平洋産業関連分析学会の保健・環境問題を含めた研究グループと、さらに環太平洋地域の環境・公害に関わるリスクアセスメント・リスクマネジメントの研究グループとの共同研究が実現すれば、地球規模での健康・環境・産業という総合的生存基盤作りに極めて大きな成果が期待される。

ハーバード大学武見講座活動報告

武見フェロー小林廉毅報告

〈武見リサーチセミナー〉

4月9日 “Local Health Service Development Policies in the Latin American Region”/ Robert Capote

「ラテンアメリカにおける地域保健医療サービスの展開」

4月18日 “An Ecological Approach to Health — Some General Principles”/Richard Levins

「健康に対する生態学的アプローチ」

4月23日 “Design and Evaluation of an AIDS Control Program in Northern Uganda”/Doris Schoppar

「北部ウガンダにおけるAIDS制圧計画」

5月2日 “Decision Support System : Cost Recovery Schemes”/Eckart Kleinau

「意思決定支援システム」

5月9日 “Researching the Epidemiological Impact of Malaria in Africa”/Uwe Brinkmann

「アフリカにおけるマラリアの疫学的研究」

5月14日 “The Public’s View of the Future of Health Care”/Robert Blendon

「医療制度に関する米国の世論」

〈武見フォーラム〉

4月12日 “Cardiovascular Disease Control: A Community Program in Lara State, Venezuela”/Bartolome Finizola (Ministry of Health, Venezuela)

「循環器疾患対策——ヴェネズエラ・ララ州のコミュニティ・プログラム」

5月8日 “Health Transition in Developing Countries: The Sri Lankan Experience with Special Reference to Female Plantation Workers”/S.W.R. Samarasinghe and Vidya Samarasinghe (Swarthmore College)

「途上国の健康問題——スリランカの女性農園労働者の事例から」

平成2年度第1回評議員会ならびに平成2年度第1回理事会

5月19日(土)正午より、生存科学研究所会議室において平成2年度第1回評議員会が開催

された。まず平成2年4月24日付けで、研究所が特定公益増進法人として内閣総理大臣か

ら認可されて継続したことが報告され、引き続き平成元年度事業報告と収支決算報告が行われ、了承された。これらの議題は、5月24日(木)午前10時30分から開催された平成2年度第1回理事会において承認された。

平成元年度は、新理事長の下での第1年度であり、これまでの経緯や一部の分断的解釈を全部見直し、最も本質的かつ総合的に財団設立目的を達成するため、全く新しく研究と実践の場を築き直す努力がなされた。その成果として、既に委託者の市原市へ提出済の『市民の健康づくり計画シンポジウム報告書』ならびに『シンポジウム発言集』と、近く岩波書店から出版される可く準備中の『科学と人間の会議』の記録が会議の資料として提出された。('科学と人間の会議'報告書は維持会員

へ配布される予定。)

収支決算に関しては、今回から環太平洋産業連関分析学会の特別会計ができ、一般会計と特別会計を明確に分けて処理されていること、自主研究、受託研究、共同研究の支出が実際の事業実施形態に即して各項目間での移動があり予算との差が見られるが、研究は予定以上に行われ、収支は健全なバランスを保っていること、年度末に入金された基本財産への寄付2,200万円余を加えれば、基本財産が10億円を突破したことが報告された。しかし継続寄付金(維持会員費)収入がまだ予算を満たさず、研究所運営の安定化のためには、実践的研究や研究誌の発行等の活動をてこに今後一層の拡大努力が必要であることが強調された。

維持会員・会員だより

維持会員異動・寄付のご紹介

(平成2年度4月1日～5月31日)

入 会

・個人

西村 淳 (株)浅井ゲルマニウム研究所、
取締役副社長

・法人

三井石油化学工業株式会社

(平成元年10月13日)

株式会社 東芝

(平成元年10月23日)

退 会

・個人

太田 邦夫 川瀬 敬輔
藤井 義顕 小松 泰司
堀内 光 田野 良雄
杉村 進

・法人

(株)セイトー

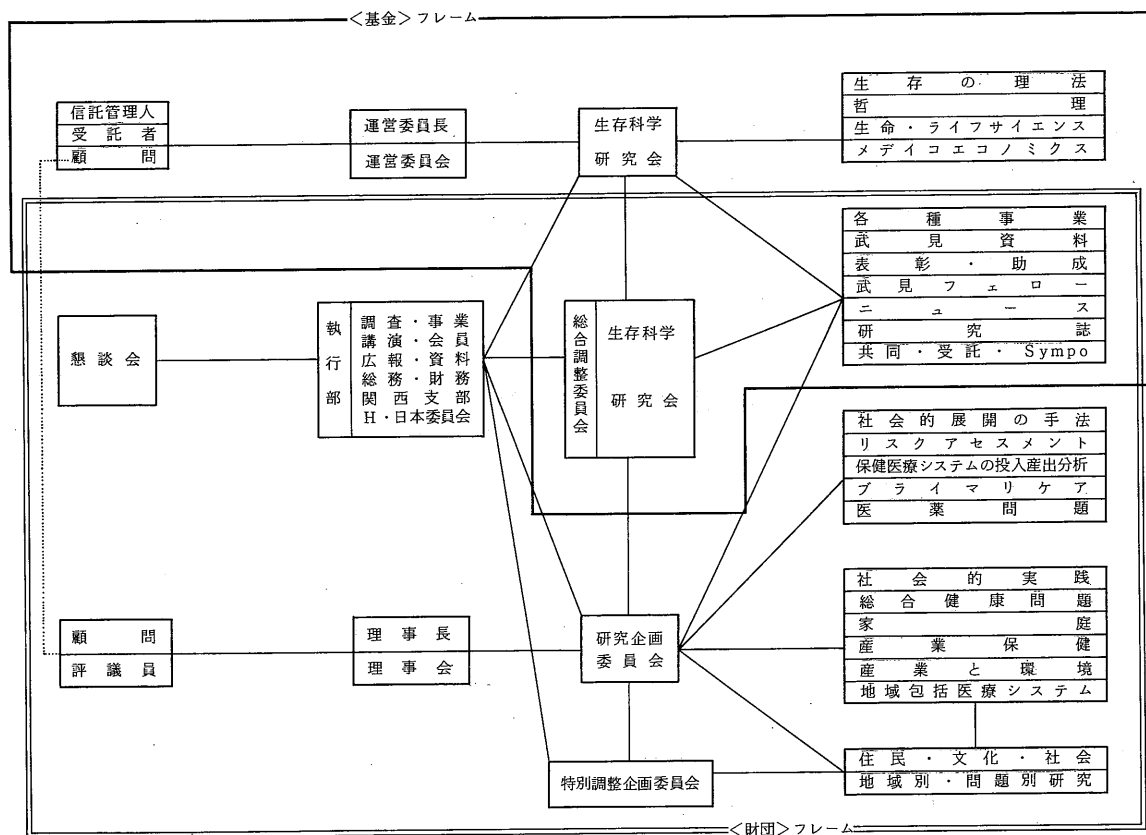
お知らせ

全武見資料を研究所に整備

故武見太郎博士の著書、講演等の全資料が

この度生存科学研究所に整備された。これは
図書館情報大学と同大学学長藤川正信生存研

組織運営概念図



なお、基金・財団に関わる「総合調整委員会」のメンバーは以下のとおり。(敬称略)
 委員長：熊谷 洋
 委員：青木 清、梅園 忠、江見康一、

小平 敦、鈴木雪夫、田村貞雄、
 筑井甚吉、土屋健三郎、中山昌作、
 藤川正信、藤野志朗、山口正民
 客 員：武見家代表 武見英子

研究所日報

- | | |
|---|--|
| <p>6月21日 第5回武見国際シンポジウム
準備会</p> <p>7月14日 研究誌「生存科学」編集委員会
同 北上川プロジェクト準備会</p> <p>7月21日 第3回常務理事会
同 第52回生存科学研究会</p> <p>8月18日 北上川プロジェクト準備会</p> | <p>8月23日 研究企画委員会
同 総合調整委員会</p> <p>8月30日 家庭問題研究委員会 (第1回)</p> <p>8月31日 医薬問題研究委員会 (第1回)</p> |
|---|--|